

令和 5 年 7 月 3 日現在

機関番号：34453
 研究種目：基盤研究(B)（一般）
 研究期間：2018～2021
 課題番号：18H00932
 研究課題名（和文）東アジアのポストコロナル経験を聞き取る－日韓台オーラルヒストリーの比較研究

研究課題名（英文）Listening to the postcolonial experiences in East Asia: a comparative study of oral history between Korea, Taiwan and Japan

研究代表者
 蘭 信三（Araragi, Shinzo）
 大和大学・社会学部・教授

研究者番号：30159503
 交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日韓台湾という東アジア三国地域における第二次世界大戦後の「ポストコロナルな経験」に関する民衆のオーラルヒストリー／口述の展開状況を比較研究することであった。2019年末からのコロナ禍で作業が大幅に遅れたが、2022年9月の国際シンポジウムにて東アジア三国地域のオーラルヒストリーの成立背景とその具体的な内容とそれぞれの相違点と共通点が明らかとなった。また同年7月のシンポジウム「東アジアの脱植民地化とジェンダー秩序 - 女性たちの経験と集合的記憶の再構築」によって、ポストコロナルな体験をジェンダーという視点からとらえ直すことが欠かせないことを明確に提示できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「東アジアにおけるオーラルヒストリーの展開と課題」という国際シンポジウムは、東アジアにおけるオーラルヒストリーの展開を比較することによって、そこでの主要なオーラルヒストリーの同型性と違いを明確にすることができた。この企画は、相互に関連するオーラルヒストリーを意識して研究する必要性を明確にしたことで、各国のオーラルヒストリー研究者に国際比較の重要性を強く意識させた。また、共催した「東アジアの脱植民地化とジェンダー秩序 - 女性たちの経験と集合的記憶の再構築」は、ポストコロナルな体験がジェンダーという視点からとらえ直すことによって、民衆のオーラルヒストリーがより大きな展開をなすことを明確に示した。

研究成果の概要（英文）：The original purpose of this research was to conduct comparative research on the development of oral histories related to 'postcolonial experiences' in East Asia, namely Japan, Korea, and Taiwan. The holding of the international symposium in September 2022, which has been extended due to the corona crisis, will clarify the background and specific content of the establishment of oral histories in South Korea, Taiwan, and Japan, and will clarify the differences and commonalities, making it a very interesting comparative study. In July of the same year, the symposium titled "Decolonization and Gender Order in East Asia: Reconstruction of Women's Experiences and Collective Memories" was held. It was able to present a review of the colonial experience.

研究分野：社会学

キーワード：オーラルヒストリー ポストコロナル経験 植民地経験 戦争経験 引揚げと送還 白色テロ 言説空間 民主化とオーラルヒストリー

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦での日本の敗戦、帝国崩壊、その後の引揚げ、占領、白色テロ、東西冷戦によって東アジアの人びとは多様な経験を経たが、長い権威主義体制と冷戦の下でその経験の語り（オーラルヒストリー／口述史）は抑圧されてきた。1991年8月14日の日本軍元「慰安婦」であった金学順のカミングアウトが契機となり、それまで抑圧されてきた人びとの語り呼び覚まされた。それは、台湾におけるポストコロニアルな経験が、その民主化によって語りだされてきたことと軌を一にする。他方で、日本での語りは戦後の早い段階から戦争被害の体験や植民地からの引揚げ体験などが「被害の語り」として行われてきた。だが、1972年の日中国交正常化によって、日中戦争や中国残留孤児に関する語り解き放たれ、90年代には日本軍「慰安婦」の語りも注目されてきた。すなわち、90年代以降、東アジアにはポストコロニアルな経験の「語りの場」が形成されてきたと言えよう。このような「語りの場」は韓国や台湾におけるオーラルヒストリー／口述史の見解をもたらし、それがまた日本にも刺激を与えた。それらの展開は、80年代後半の民主化や東西冷戦崩壊を踏まえた世界的な「記憶の再審」といううねりのなかで登場してきた「聞き手」の存在が欠かせない。本研究は、この「聞き手の登場」によって、抑圧され、語りづらかったポストコロニアルな経験が語られた状況を踏まえている。

2. 研究の目的

東アジア近代は西欧近代への編入とその植民地化、日本の植民地帝国化が特徴であった。だが、日本の敗戦によって帝国は崩壊し、植民地は解放された。日本は連合国の占領下で民主化がすすんだが、韓国・台湾では白色テロ、中国では内戦、そしてその後の冷戦構造下での対立、朝鮮戦争という激動の時代のなかで人びとは様々な経験を生きた。植民地経験、戦争経験、日本人の引揚げや内地や満洲からの朝鮮や台湾の人びとの送還（引揚げ）経験、はたまた4.3事件とその後の日本への「密航」、台湾での2.28事件と内地への再移動等々が経験された。

帝国崩壊前後の多様な経験が庶民の記憶に刻印されながらも、それらは権威主義体制下で長らく封印されてきた。このような抑圧された記憶は、80年代の民主化や冷戦崩壊によって解き放たれ、東アジアにはポストコロニアルな経験の「語りの場」が形成された。各地で無数の民衆の語りながされ、それらは相互に刺激しあい、さらなる語りへと連なった。そのような東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史の展開と相互の影響を比較研究することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、まずは東アジア各地における民衆の経験に関する語りの作品を収集し、比較研究を行うことにあった。同時に、日韓台を中心にオーラルヒストリー／口述史研究ネットワークを構築し、東アジアにおけるオーラルヒストリーの展開を国際比較の観点から論じるシンポジウムを開催し、最後に「東アジア・オーラルヒストリー・アーカイヴ」を構築するというアプローチを用いた。

4. 研究成果

(1) 東アジアのオーラルヒストリーの比較、ジェンダーからの捉え直し

2019年からのコロナ・パンデミックで本研究の進行は大きく阻害され、途中から韓国や台湾へのフィールドワークが行えなくなり、「東アジア・オーラルヒストリー・アーカイヴ」構築は今後の課題として残されてしまった。しかし、それぞれの領域におけるオーラルヒストリー／口述史に関する主要作品の状況に関する調査はほぼ終わった。また、2022年9月に「東アジアにおけるオーラルヒストリーの展開と課題」という国際シンポジウムを本科研チームと日本オーラル・ヒストリー学会との共催で開催したことで、韓国、台湾の代表的な研究者と本科研の研究代表者である蘭が日本オーラル・ヒストリー学会を代表して登壇し、それぞれの事情を詳細に報告した。その結果、各国におけるポストコロニアルな経験はそれぞれの国内事情とともに、世界的な冷戦体制に規定されていたこと、それぞれの民主化後にオーラルヒストリー／口述が噴出したこと、方法論的な共通点が多いことなどが明らかとなった。さらに、同年7月には京都大学人文科学研究所アカデミーにてシンポジウム「東アジアの脱植民地化とジェンダー秩序—女性たちの経験と集合的記憶の再構築」を共催したが、研究代表者の蘭の司会進行で進められ、研究分担者の伊地知や中山が登壇して報告したが、そこではポストコロニアルな体験をジェンダーという視点からとらえ直すことで、ポストコロニアルな体験に関する認識の刷新が行われることが示され、大きな反響を得た。各研究分担者もそれぞれの活動を以下のように行い、確実な研究成果をもたらしていると言えよう。

(2) 韓国のオーラルヒストリー、在日コリアンのオーラルヒストリー

まず、研究分担者の李洪章は、韓国におけるオーラルヒストリーの研究史を整理・考察したうえで、韓国・国史編纂委員会資料館で在日韓国人留学生「政治犯」に関する口述資料を収集した。また、その資料に基づき、「棄民」としての側面が強調されがちであった在日韓国人留学生「政治犯」のナショナルリティに焦点を当て、国際日本文化研究センターでの研究会で研究報告を行った（研究報告「在日朝鮮人留学生にとっての「母国」と「統一」」（国際日本文化研究センター共同研究会「帝国のはざまを生きる」第4回研究会 2020.8.27）。同時に、韓国におけるオー

ラルヒストリー／口述史の第一人者である尹澤林氏（韓国口述史研究所）と連携をとり、本科研と日本オーラル・ヒストリー学会が共催した国際シンポジウム「東アジアにおけるオーラルヒストリー／口述史の展開と課題」（2022年9月11日）に同氏を招聘した。李は同シンポジウムを研究代表者の蘭と共に企画し、総合司会を務めた。この国際シンポジウムでは、台湾からも同オーラルヒストリー／口述史の第一人者である許雪姬氏（台湾中央研究院）を招聘しており、日本からは研究代表者の蘭が登壇し、三ヶ国・地域におけるオーラルヒストリーの方法論やアーカイブ化などをめぐる課題についての議論を先導した。また、蘭・李他編著の『帝国のはざまを生きる—交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（共著、みずき書林、2022.4）では、ディアスポラの語りを安易に「トランスナショナル」という枠に嵌めようとする近年の在日朝鮮人研究の傾向を批判したうえで、ディアスポラのナショナルな現実に注目してこそ、そのトランスナショナルリティを立体的に描き出すことにつながることを指摘した。

伊地知紀子は、伊地知紀子・梁聖宗・金良淑編『済州島を知るための55章（エリア・スタディーズ166）』（明石書店、2018年）や、伊地知紀子「済州四・三と市民運動—ローカルな和解実践」（外村大編『[和解学叢書4＝市民運動] 和解をめぐる市民運動の取り組み—その意義と課題』（明石書店、2022年）等の研究成果を提出した。そして、大阪と在日コリアンについての調査史を概観する論文を公刊したのみでなく、生活史研究の蓄積を地域に共有する資料館準備に入った。さらに、生活史研究の成果を韓国済州大学校の院生に講義し、韓国での国際シンポジウムへの登壇は毎年度行い、国際学会（AAS）での分科会も担当し、『第20回日韓歴史家会議』への参加の機会を得るなど多くの研究成果を残した。

山下英愛は、これは新版での問題提起を韓国語で発表した（2022年8月）のがきっかけで、韓国の女性学研究者たちと筆者の問題意識を広く共有することができた。（『新版 ナショナルリズムの狭間から「慰安婦」問題とフェミニズムの課題』（岩波書店、2022））。また、学会などでの口頭発表としては、「日本軍慰安婦運動の現在の課題を考える—この間の問題提起を振り返りつつ」（日本軍「慰安婦」被害者記念日国際フォーラム＜紛争と女性人権：移行期の正義と責任の政治＞ ソウル特別市、梨花女子大学女性研究院共催、2022年8月11日）を報告し、金恩実ら韓国の女性学研究者たちと共著で「慰安婦」問題に関連する本を出版する準備を始めた（本年度中に出版予定）。山下は「“狭間”の視点から見た日本軍「慰安婦」運動～私の経験と葛藤を中心に～」を執筆した。

福本拓は、東大阪市における労働運動において、戦後韓国の労働搾取への抵抗運動との連帯が、地域スケールとグローバルスケールの交錯の中でいかに展開してきたかについて、その後の記録事業に関わった関係者から聞き取りを行った。そして、資本家対労働という階級の問題が、運動の空間的スケールの拡大を介してポストコロニアルな問題意識と接合してきたという経過が、これまでの運動の振り返りや資料整理からより明確になり関係者に認識されていた。つまり、このような動きは、新自由主義的な都市政策と排外主義の結びつきの中で、地域からのオルタナティブかつポストコロニアルな包摂のあり方を呈示するものであることを示した（福本拓『大阪のエスニック・バイタリティ—近現代・在日朝鮮人の社会地理』京都大学学術出版会、2022年、福本拓「エスニック市場、大阪生野コリアタウンの変容」『K』4号、2022年、27-31頁）。丁智恵は、在日朝鮮人をめぐる映像メディアの分析から、「朝鮮戦争報道と占領期日本—映像メディアの分析を中心に」（蘭信三ほか編『帝国のはざまを生きる 交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』みずき書林、2022年3月、181-213頁）や、「越境する左派的映画人と在日朝鮮人のネットワーク」（崔銀姫編『東アジアと朝鮮戦争七〇年：メディア・思想・日本』明石書店、2022年11月、308-319頁）を研究成果として刊行した。

(3) 満洲、台湾、沖縄そして奄美をめぐる移動のオーラルヒストリー

八尾祥平は、日本帝国敗戦後、台湾と沖縄との間に国境線が引かれ、出入国管理が行われるようになった後も、国家と国家の間を物理的にも社会的にも移動する女性の家族史を題材に、海民論や民主主義の植民地起源論を援用しつつ、国家を中心とした地域秩序の〈はざま〉を、国家による統治からは相対的に自立した個人の〈あいだ〉につくりあげられる社会空間として捉えなおそうとした。また、「戦後」台湾から沖縄へ引揚げたものの、すぐに台湾へ再移動した漁民の家族のファミリーヒストリーを足掛かりに、冷戦期の沖縄と台湾のはざままで、国家とは相対的に距離を置きつつ生きる人々が主体的に社会をつくりだしてきた歴史を掘り起こし、こうした海洋民の主体性が民主的な社会を作り出す基盤になってきたという近年の歴史学・人類学での研究成果を参照しつつ、民主的な社会をつくりだすための社会的条件を探った。さらに、また、「西表炭鉱の歴史から台湾と沖縄・八重山の人の移動を考える—映画『緑の牢獄』が提起するもの」（『植民地文化研究』第20号、2021年10月、pp.20-26（依頼原稿））において、戦前の西表炭鉱で暮らした台湾人の家族史についてのドキュメンタリー映画『緑の牢獄』を題材に、この作品の歴史的背景となっている植民地統治と台湾・沖縄間の人の移動や経済開発の問題を概説した。その上で西表炭鉱の経済開発をめぐる問題は今なお過去の歴史となったわけではなく、現在の八重山の問題とも直結している問題であり続けていることを指摘した。

野入直美は、満洲引揚者の本土出稼ぎ、満洲渡航、奄美引揚げ、沖縄移住、上京という複数の移動の連鎖という生活史調査を『沖縄—奄美の境界変動と人の移動：実業家・重田辰弥の生活史』（みずき書林、2021年3月）にまとめた。また、沖縄のアメラジアン（メキシコ系）の生活史調査を『沖縄のアメラジアン：移動と「ダブル」の社会学的研究』（ミネルヴァ書房、2022年2月）として刊行

し、さらに「湾生」を描いたドキュメンタリー映画の分析による引揚、記憶と映像表象の考察を「湾生映画にみる植民地二世の記憶と表象」蘭信三ほか編『帝国のはざまを生きる 交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』（みづき書林、2022年3月、355-376頁）にまとめ、実り豊かな研究成果を提出した。

佐藤量は、「序章」、「女学生の満洲記憶—大連弥生高等女学校同窓会誌『弥生会々報』の分析から—」佐藤量・菅野智博・湯川真樹江『戦後日本の満洲記憶』（東方書店、2020年、1-29、225-252頁）や「引揚者の都市記憶」横浜国立大学都市科学部編『都市科学事典』（春風社、2021年、14頁）や、「戦後日本のなかの引揚者：満洲の記憶と想起をめぐって」梅村卓・大野大幹・泉谷陽子『アジア遊学 満洲の戦後 継承・再生・新生の地域史』（勉誠出版、2018年、54-60頁）等を執筆した。佐藤は、満洲引揚者へのインタビュー調査の実施や、満洲引揚者がのこした日記や会報などの一次資料の収集、保存、分析などから、満洲引揚者の歴史と記憶をめぐる研究書の刊行を行うなどの研究成果をものした。

伊吹唯は、中国帰国者に対するライフストーリー調査を実施し、かれらの日本社会における生活状況と社会統合の状況について調査を行った。日本の移民送出地域における出移民史の継承活動について、聞き取り調査を実施し、「エスニック移民から考える社会統合—『日本人』と『外国人』のはざま—『AGLOS』9号、2020年、15-35頁、「地域社会によるオーラル・ヒストリーの継承の可能性と限界—『下伊那のなかの満洲』の事例から」（2022年、日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会）でその研究成果を報告した。

(4) サハリン残留者のオーラルヒストリー

中山大将は、サハリン残留日本人・朝鮮人、樺太引揚者計64名のオーラルヒストリー研究を行ない、その研究成果を中山大将『サハリン残留日本人と戦後日本：樺太住民の境界地域史』（国際書院、2019年）と中山大将「サハリン樺太史研究会10周年シンポジウム「世界におけるサハリン樺太史研究」」（『北方人文研究』第13号、2020年、59-60頁）にまとめた。また、2018年12月にオーラルヒストリーも含めた日韓英中各言語のサハリン樺太史研究の研究動向を総覧する国際シンポジウムを企画開催した（サハリン樺太史研究会10周年シンポジウム「世界におけるサハリン樺太史研究」）。さらに、オーラル・ヒストリーも含めた日韓英のサハリン残留朝鮮人研究の研究史整理論文の日本語訳の監修を行なった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 蘭 信三	4. 巻 14
2. 論文標題 特集1 戦争経験の継承とオーラルヒストリー はじめに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	6. 最初と最後の頁 5~
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24530/jjoha.14.0_5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 福本拓	4. 巻 64巻3号
2. 論文標題 在日朝鮮人事業所の空間的分布と集住地区との関係性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経済地理学年報	6. 最初と最後の頁 194-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 伊地知紀子	4. 巻 17巻
2. 論文標題 済州4・3を語る、済州4・3から語る	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フォーラム現代社会学	6. 最初と最後の頁 127-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20791/ksr.17.0_127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 丁智恵	4. 巻 24号
2. 論文標題 テレビドラマ『口笛は冬の空に』（NHK:1961）に描かれた小松川事件と北朝鮮帰国事業 『植民地的記憶』の周辺化に抗う痕跡	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京工芸大学芸術学部紀要	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 蘭信三
2. 発表標題 Repatriation, Settlement, 'Left-behind' and 'Smuggling': the racial migration after W.W.II. in East-Asia
3. 学会等名 East Asian Seminar Series at the University of Cambridge (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 蘭信三
2. 発表標題 趣旨説明：アジアがひらく日本
3. 学会等名 5. 社会学コンソーシアム・日本学会会議第11シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丁智恵
2. 発表標題 NNNドキュメントが描いたアジアの戦争被害
3. 学会等名 日本映像学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 丁智恵
2. 発表標題 敗戦/解放直後の在日朝鮮人による民主主義メディアの萌芽と実践
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 蘭 信三、川喜田 敦子、松浦 雄介	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 352
3. 書名 引揚・追放・残留	

1. 著者名 蘭信三	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 302
3. 書名 日本人と海外移住	

1. 著者名 蘭信三・福本拓	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 304
3. 書名 産業構造の変化と外国人労働者 - 労働現場の実態と歴史的視点	

1. 著者名 佐藤量	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 満洲の戦後	

1. 著者名 中山大将	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国際書院	5. 総ページ数 389
3. 書名 サハリン残留日本人と戦後日本：樺太住民の境界地域史	

1. 著者名 梁聖宗・金良淑・伊地知紀子共編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 355
3. 書名 済州島を知るための55章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中山 大将 (nakayama taisho) (00582834)	釧路公立大学・経済学部・准教授 (20102)	
研究分担者	権 香淑 (kwon hyang suk) (00626484)	上智大学・総合グローバル学部・助教 (32621)	
研究分担者	伊吹 唯 (ibuki yui) (00880189)	熊本保健科学大学・保健科学部・助教 (37409)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 量 (sato ryo) (20587753)	立命館大学・先端総合学術研究科・非常勤講師 (34315)	
研究分担者	李 洪章 (lee hongjang) (20733760)	神戸学院大学・現代社会学部・准教授 (34509)	
研究分担者	伊地知 紀子 (ijichi noriko) (40332829)	大阪市立大学・大学院文学研究科・教授 (24402)	
研究分担者	田中 里奈 (tanaka rina) (40532031)	フェリス学院大学・文学部・准教授 (32711)	
研究分担者	福本 拓 (fukumoto taku) (50456810)	南山大学・人文学部・准教授 (33917)	
研究分担者	坂田 勝彦 (sakata katsuhiko) (60582012)	東日本国際大学・健康福祉学部・教授 (31604)	
研究分担者	山下 英愛 (yamasita yeong-ae) (80536235)	文教大学・文学部・教授 (32408)	
研究分担者	八尾 祥平 (yao syohei) (90630731)	東京大学・大学院総合文化研究科・特別研究員 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	丁 智恵 (chung jihye) (90794545)	東京工芸大学・芸術学部・助教 (32708)	
研究分担者	野入 直美 (noiri naomi) (90264465)	琉球大学・人文社会学部・准教授 (18001)	
研究分担者	高 誠晩 (koh sungman) (40755469)	立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員 (34315)	削除：2018年9月12日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			